

ハマシギ *Calidris alpina* (Linnaeus)

【選定理由】

本種は干潟を代表する水鳥で、越冬するシギの中では最も数の多い種である。愛知県で越冬するものが北アラスカで繁殖することは分かっているが、正式な亜種名は不明である。飛来数、越冬個体数共に減少傾向が継続していることから、県内の越冬個体群は絶滅危惧Ⅱ類と評価された。

【形態】

全長 21cm。夏羽は頭から背が赤褐色で各羽根に黒斑があり、顔から下面は白く、黒く細かい縦斑と腹には大きな黒斑がある。冬羽は上面が褐色味のある灰色で下面は白。幼鳥の上面は夏羽に似るが全身がべったりした褐色で、胸から腹に黒褐色の細かい縦斑がある。



愛知県西尾市, 2017年12月29日, 高橋伸夫 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

主に伊勢・三河湾に流れ込む大小河川の河口干潟、外洋に面した海岸、三河湾の島嶼の岩礁などに飛来する。

【国内の分布】

北海道から沖縄まで全国で越冬するが、東北以北や本州の日本海側では越冬数が少ない。

【世界の分布】

ユーラシア大陸・北アメリカ大陸の高緯度地域およびグリーンランドなどの沿岸部で繁殖し、北半球の中緯度以南で越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

シギ・チドリ類の中でも本種は、特に塩水の干潟を好んで生息する種のひとつであり、干潟環境を代表する水鳥でもある。しかし、かつては越冬期でも内陸の淡水湿地へ飛来して採餌する例も多く、愛知県鳥類生息調査では木曾川玉ノ井で1990年12月に600羽、木曾川葛木で1995年1月に251羽の記録もあるが、生息数が激減した現在は、殆ど飛来していない。県内の越冬数は年によって変動があり、越冬期に最大になる年や、渡りの季節に最大になる年などもあって、一様ではない。

【現在の生息状況／減少の要因】

現在の県内で百羽程度、あるいはそれ以上の群れが飛来する場所は庄内川河口周辺、境川河口、一色干潟周辺、三河湾の島嶼、汐川河口周辺および伊川津干潟周辺である。1975年5月には矢作川河口で6,500羽、11月には汐川河口で9,986羽、庄内川河口では2000年4月に8,650羽という記録もあるが、現在は矢作川河口で0～10羽、汐川河口と庄内川河口でそれぞれ1,000羽程度である。

減少の最大要因は埋め立てによる干潟の減少であるが、県内全域で下水道が普及したことにより、干潟や海の生物を育む栄養塩類が減少している。加えて、満潮時に採餌や休息のできる淡水や汽水の後背湿地が減少していることで、干潟は残されていても生息する野鳥のためには十分機能していない。

【保全上の留意点】

県内で残されている干潟の周辺に、淡水や汽水の湿地を回復することが必要である。例えば干潟の周辺に位置する水田に、麦や大豆を植える転作でなく毎年水稻の作付けができる農業施策や、冬期湛水なども大きな効果がある。干拓地や埋立地の遊休地に湿地を回復することも重要である。

【特記事項】

2015年度に1年間、三河湾のひとつの島嶼で調査を実施したところ、砂地のほとんどない島で410羽の越冬が確認された。この島では干潟でなく、潮の引いた岩礁での採餌が確認されている。

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.287. 平凡社, 東京.

(高橋伸夫)